

## 『愛してる、ビシュケクよ』

ビシュケクでの映画祭の仕事を終えて、帰国を急ぐ必要のなかった私は、そのまま夏季休暇をとることにした。まだ空も明るくならないうちに、1台の車が私を迎えにホテルの前に止まった。映画祭のアテンドをしてくれたアリヤが、助手席で手を振っている。運転しているのはアリヤの恋人で、コメディ映画『ビシュケク、愛してる』を撮った若手監督エルダルである。私は、実家に帰るというアリヤの誘いを受けて、その道中を途中まで同行することにした。

アリヤの実家はこの国で2番目に大きいオシにある。飛行機であれば半時間ほどだが、半日かけて山道を越えていく行程は、絶景の連続である。数日の間、朝から晩まで映画漬けだった私は、映画を離れこの国の豊かな自然に触れたかった。国の南部には壮大な山々が連なっている。私はオシの少し手前にある、ジャララバードというかつて鉱泉が栄えた小さな町も訪れ、2,3日経ってアリヤに追いつく計画だった。

もっとも、エルダルが険しい山道を越えて運転して行くわけではない。車は15分ほど走り、街外れのバスターミナルに止まった。ここから小回りのきくミニバスに乗っていく。乗客は私たちの他に、オシへ帰省する人たちが10人ほど乗り込んだ。ビシュケクで仕事を残しているエルダルに見送られた私たちは、車が走り出すと眠り込んでしまった。

間もなく夜が明けると、すでに車は山道を走っていて、窓の外には壮大な光景が広がっていた。2,3時間おきに車はトイレ休憩で止まり、息苦しい車の外に出て吸う空気が気持ちいい。もっともトイレといっても、よくてベニヤ板で区切られた穴があるだけで、男たちは皆、手っ取り早く用を済ますため、草むらの中へ消えていった。

景色のよいこの道は、サイクリストのバックパッカーの間でよく知られており、車は何回もテントを積んで走る外国人の自転車を追いついた。中には、ひとり日本人らしき青年が走っている姿も確認できた。2回目の食事休憩をしてしばらく経った頃、8時間ほど走り続けた車はジャララバードの街外れに到着した。

ジャララバードの人口は10万人を少し越えた程度だが、この国では3番目に大きな街である。かつて栄えた鉱泉跡の他には特に目を引くところもなく、かえって地元の人々の熱気が感じられるのがよい。私は街の中心に建てられた真新しい簡素なホテルに投宿した。暗くなる前に街の散策と夕飯を済ますため、私はシャワーをさっと浴びると、すぐに街に繰り出した。通りに並んだケバブなどのファーストフード店を眺めているだけでも楽しい。

喧騒が途切れた一画で、大きな白いユルタが目にとまった。ユーラシアに広く見られる、移動式住居である。その前にはテーブルが並んでいて、カルパックという伝統的な帽子を被った老人がひとり、お茶をすすっている。レストランのようだ。思わず目が合った老人が「サラーム・アレイクム」と声をかけてきたので、私も「アレイクム・サラーム」と儀礼的に返事を返す。顔に深い皺の刻まれた老人は、寄って行きなさいと言って、私を中に招いた。

大型のユルタの中はかなり広く、女主人が出てきて、ラグマンならすぐ出せると言う。シャシリクは時間がかかるというが、麺料理を食べながら待つことにした。表にいた老人

はてっきり彼女の肉親かと思ったら、彼もまたお客なのだと言う。私たちは皆、誰かの人生の客人である。旅をしているとよく感じるそんなことを思い、私はこの店に言いようのない居心地の良さを感じた。

私の他には、数人の年配の男女が宴会を催しているだけだった。聞くと高校の同窓会だそうだが、だいぶ落ち着いた雰囲気、アルコールなしでお茶を飲んでいる。お茶やラグマンを運んできたのは、小学生くらいの、女主人の子どもたちである。特別愛想のいいわけでもない私だが、昔からなぜか子どもに好かれるところがある。珍しい外国人の客ということあって、子どもたちは料理を運んできた後も私の元を離れず、学校で使っている教科書などを見せてくれた。

やがて、女主人の長女アイダがシャシクを運んできた。21歳という彼女も少し離れたところに座って、私が炭焼きの香ばしい羊の肉に舌鼓を打っているのを眺めていた。同窓会のグループが興が乗ってきたのか、店内でかかっている音楽に合わせて踊り始める。一通り仕事を終えた女主人が新しいお茶を持ってきて、お互いのことを話す時間が訪れた。女主人の夫はシベリアへ出稼ぎに行っていて、彼女は6人の子どもたちに手伝ってもらいながら、店を切り盛りしていると言う。私が自分の年齢を告げると、彼女はなぜ結婚しないのか、と言う。この国にいと、よく言われることだ。

食事がひと段落すると、女主人が私に、アイダと一緒に踊ってあげてくれ、と言う。こういう類の誘いを、外国では断らないことにしている。私はアイダに声をかけ、老人グループの緩やかな動きを見よう見まねで真似した。側から見れば滑稽な動きだろうが、女主人は満足そうである。

一通り踊ったところで、私はテーブルに戻り、またひとつの家族のように食卓を囲んだ。女主人が笑顔で、アイダと結婚しないか、と本人を前にして言う。家事もできるし、料理もうまい。私は、日本での仕事を捨てて、この街で生きる自分を想像してみる。時間に追われることのない、ストレスとは無縁の生活だ。死ぬまでに、この国で生きることになった自分の生涯を本にまとめ、変わった日本人がいたということで少し世間を賑わすが、やがては完全に忘れ去られる。そういう人生も悪くない。私は急に、日本でのしがらみを断ち切って、この土地の生活に飛び込みたい誘惑に駆られる。

だがひとつ問題があった。この街には映画館がなかった。自分には、映画のない人生は考えられない。オシにはいくつか小さい映画館があると聞く。明日は早起きして鉱泉を見物したら、オシへ行って映画を見よう。アリヤに映画館へ案内してもらおうのだ。「結婚してきた」と言ってアリヤを驚かせるのも面白いが、「映画が見たくて」と言って予定より早くオシへ行く方が自分らしい。アリヤの呆れた顔が、目に浮かぶようだ。